ふるさと大使・ふるさと人材バンク掲載者の声

寄り添って ともに元気に

藍 早瀬

昨年十一月、介護予防活動に取り組む「いきいきサポーター高遠」がチヨダ地域保健推進賞を受賞した。「いきいきサポーター」は二〇〇五年に発足（伊那もこの二年後に発足）。①住民の中から転倒予防・介護予防の推進員となる人材を育成 ②高齢者の健康づくりのためのオリジナル体操を作成 ③地域の集会所・公民館を利用して「おたっしゃ教室」を開催。地域住民を巻き込み「いきいきサポーター」が中心となり健康づくりを展開 を3本柱に取り組んできたことへの評価である。

今年は、10期生の募集が行われる。

私は常々、「チャンス・チャレンジ・チェンジ」を大切にしよう！と呼びかけているがこのいきいきサポーターに応募し、新しいことにチャレンジする方々に「ああ、サポーターになって良かった！」を実感していただくための仕掛けを度々行っている。

1年に一度の発表会を兼ねた交流会、2年に一度の東京・代々木体育館での元気フェスティバルでのゲスト出演、3年に一度の沖縄読谷村での交流・学習会等等である。人とのふれあい、同じボランティアの方々との交流などで、毎回新しい刺激を受けて欲しいとの願いが込められている。

また、愛着を感じ日常的に体操して欲しいと、最近では「孤軍高遠城」に振り付けをし、歌いながら動いている。（この作詞を 父 北原徳治がしたということを高遠に通いはじめて知った）

昨年、「行ったり・行ったり」で一回目30名、二回目40名がお邪魔し、お世話になった読谷村から30名のボランティアが「長寿調査検証事業」の一環として高遠町に研修に訪れた。紅葉の美しさに感嘆し、リンゴの実りを見て感動し、採れたての野菜・打ちたての蕎麦に舌鼓を打った。何よりもサポーター達のおもてなしに感謝の言葉が返ってきた。10年がかりでようやく「行ったり・来たり」が実現し、人との絆・ふれあい・縁をみんなと共有できたことは大きな喜びであった。

励ましたり・励まされたり
教えたり・教えられたり
助けたり・助けられたり
労わったり・労わられたり
声かけたり・声かけられたりの、「行ったり・来たり」でこれからも自分のため・地域のために、健康で安心と生きがいのあるまちづくりを目指して活動を続けて言って欲しい。

＊ 高遠町に通い始めて10年目になりさくらホテルでの宿泊も一五〇回を超えた。前々回はこの欄に「考・さくらホテル」でいろいろと耳に痛いことを書かせていただいた。毎回、少しずつサービス・スマイルが向上し、料理にも工夫がされてきたことを肌で感じている。今後の発展を応援し続けていきたい ＊

（社会福祉士、健康運動指導士）

宇宙に向かう心

秋山 智弘

二〇一一年、伊那市創造館でスタートした「宇宙の学校・伊那」は、今年四年目をむかえます。「宇宙の学校」は、小学生とその父母を対象に、家庭学習と「スクーリング」を組み合わせた、宇宙教育ミッションです。

「子ども・宇宙・未来の会（KU—MA）」および「JAXA（宇宙航空研究開発機構）」と伊那市が、協力、連携して開校した新しい教育システムです。

「宇宙の学校」を発想されたのはJAXA名誉教授の的川泰宣博士でした。

的川さんは次のように考えました。

子どもたちは、「宇宙に向かう心」を持っている。そして、自然や生物の生きた姿に接して「命のいとおしさ、大切さ」にも気づいている。

大きな「宇宙」に包括されるこの星の、自然のさまざまな素材を活用して、日本の子どもたちの心に「好奇心」、「冒険心」、「いのちを愛しむ心」を育んで行きたい。どちらかというと「科学」や「宇宙」を苦手に思っているような母親も一緒に、親子の心を結びあわせ、家族共々宇宙を身近に感じる存在にしてもらおう —。

的川さんは、わが国を代表する宇宙科学・ロケット工学者のお一人で、映画「はやぶさ」では、西田敏行さんが的川教授役を熱演しています。

子どもの宇宙教育に熱心に取り組まれ、「宇宙教育の父」と呼ばれてきました。ことに、一〇歳ころまでの子どもの「感性育成」を重視し、長年の夢を「宇宙の学校」という形で実現されました。

以前から親しかった私は、的川さんのお誘いで、「ＫＵ―ＭＡ」の創設に参画し、組織作りや、各地の「宇宙の学校」をお手伝いしています。

伊那市では、白鳥市長さんをはじめ、教育委員会のご配慮で「宇宙の学校」を、創造館の科学教育事業に位置づけていただいています。

ＪＡＸＡ提供の科学テキストをもとに、カリキュラム指導はＫＵ―ＭＡの専門家が担当。年五回のスクーリングが行われます。子どもたちが、目の前の事象に好奇心を抱いた時、それを確かめるために「科学の思考」が役立つことを知ってもらう。科学の楽しさを学ぶ場が「宇宙の学校」です。創造館、捧剛太館長さんの指揮のもと、館員の方々、貴重な時間をさいて指導してくださる市内小学校の先生方、ボランティアの皆さんのお力ををお借りして、充実した「宇宙の学校・伊那」が開かれています。

的川さんの情熱あふれる宇宙講話を聴き、眼をきらきらさせて実験に取り組む伊那の子どもたちの姿に、私はこの星の未来を想い、いつも感動しています。

（認定ＮＰＯ法人　子ども・宇宙・未来の会（ＫＵ―ＭＡ）　理事・文化事業プロデューサー）

出逢いと繋がり、そしてこれから…

あさみちゆき

伊那市とのご縁をいただき、今年で八年。

今年も伊那市でのコンサートが決定しました。

伊那市との最初の出逢いは、現在、コンサートの実行委員長を務めて下さっている金澤ご夫妻の熱い応援から。ご夫妻が、伊那市でコンサートを！と伊那市の皆様にお声掛けいただき、「砂利広場」でのトラックのステージから始まったライブは、「いなっせ」に移り、そして「伊那文化会館小ホール」、そして「大ホール」へと大きく大きくなりました。金澤ご夫妻から始まった出逢いは、どんどん広がり、沢山の輪が出来始め、伊那市の皆様、伊那市長、副市長、市役所の皆様…人の輪の繋がりを、こんなに間近で経験させていただいていること、こんなに幸せなことは有りません。貴重な経験は、自分が歌手生活を過ごす中で、一番大切なこと「歌う理由」に気付かせてくれたのです。夢は、もちろん大切なのですが、一番大切なこと…自分は何がしたいのかということ。

私が歌を始めたきっかけ…兄が亡くなり、両親の笑顔が消え、私に何が出来るかを考えた時、「歌」だったこと。歌を唄うと両親が笑顔になってくれた。それが嬉しかった。両親の笑顔が見たいという思いから始まり、近所のおじちゃん、おばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん。ストリートライブを始めてからは、歌を聴いて下さる方々の笑顔、歌手になってからは、ファンの皆様の笑顔を見たいから。皆様と繋がっていたいから。一緒に時間を共有したいから。デビューして十二年。一番大切なことに、あらためて気付いたのです。

目指すは「となりのちゆき」

歌人生も私自身の人生も、人との繋がり。繋がりを大切にして、これからも生きていきたいです。

人に寄り添い、そして歌に寄り添い…

細く長く歌っていける、そんな歌い手を目指したいと思います。

全てを作ってくれている「出逢い、繋がり、これからに…」感謝。

（歌　手）

経験と感謝の十一年間

有賀　暁子

私は二十五年度三月いっぱいで、ＮＨＫテレビ体操の出演を引退する。

大学在学中、２年生の時にＮＨＫテレビ体操のオーディションに合格し、実技の出演者として採用された。二十歳の時だった。

私は国文学科だった。文系の大学からはテレビ体操史上初めての採用となった。結局後にも先にも、私の採用のみで、後は体育大生採用の流れになっている。

本当に何というタイミングと運に恵まれたことだろうと、しみじみ思う。

あれから十一年の月日が流れた。

今、振り返って全体を見るとあっと言う間だった。

色々な事がたくさんあった。楽しいこと、苦しいこと、感動したこと、絶望したこと、そのすべての経験が私には必

要だったし、それがあったからこそ今の私がある。

実は、実技の出演者で十一年間務めた人は前例がなく、私がテレビ体操の中で一番長く務めさせていただいたことになる。

スタジオ収録はもちろん、地方のラジオ体操生放送、各イベント、本当に様々な活動を経験できた。

ただ、体を動かすことが好きで、健康の素晴らしさを伝えて、人の役に立ちたい、その思いだけがいつも熱くあった。

やりがいのある、自分に合った仕事を長きに渡り務めさせていただいた。

支えてくださったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいだ。

これからは、フリーになる。色んな思いがありつつ、今、とてもワクワクした気持ちでいる。

今まで得たかけがえのない経験と感謝を生かして、ますます多くの人々の役に立てることをしていきたい！

伊那市の皆様にもお会いできる機会が多くなると思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（ＮＨＫテレビ体操インストラクター）

駒ヶ岳

井口　昭久

私が信州で育った時期は、いつも駒ヶ岳に見張られていた。駒ケ岳が見えない場所で生活するようになると、時折嘘をつくようになった。

中央高速道路でスピード違反で警察に捕まった。名古屋への帰路、駒ヶ岳が見えなくなると油断した。十五年ほど前で、入院患者を診ていたので忙しかった。

私は警官に「患者が待っているので急いでいました」と言うと、「そういう時はパトカーが先導します」と言った。私は、急いでいなかったので、交通違反切符を持たされて、裁判所へ出頭する羽目になった。

若手の教授であった頃、ある懇親会で話しかけてきた人がいた。「先生のところの若手の教授と懇談会を持ちたいので、集めてもらえませんか」。私は二人の教授に声をかけてホテルの喫茶店で待った。しかし二時間待ってもその人は現れなかった。私たちは怒って解散した。

二日後に約束をすっぽかした人が手土産を下げて現れた。「済みませんでした。熱が出て意識がなくなってしまいました。もー1回機会を作ってください」と言ったので、私は怒った。「私たちは忙しいんだ。分刻みの生活の中から三人のスケジュールを合わせるのは奇跡だ。もう二度とあのような機会は作れない！」。彼はひたすら恐縮していた。私は一呼吸置いて尋ねた。「ところであなたはどんな仕事をしているの？」「たとえば先生の交通違反なんか、私が一言いえば何とかなります。」

私は咄嗟に言った。「それじゃ、もう1回やろう」「先生たちは、忙しんじゃないですか？」「暇だからいつでも会えるよ」「3人でもですか？」「3人とも暇をもてあましているよ」

私たちは、結局彼と会食をしたが、彼を利用することなく彼は落選してしまった。

私の住んでいる濃尾平野では、駒ヶ岳も御嶽山も見えない。

大学の近くに丘がある。先日学生を連れて登ってみると、丘の上には山岳信仰の神社があり「御嶽山」が祭られていることが分かった。

御嶽山の分身が、近くで私を見張っていたことに、今まで気がつかなかった。

（名古屋大学名誉教授・愛知淑徳大学教授）

挿絵　茶畑

「郷土料理」で〝おいでなんしょ〟

伊藤　治

だいじにしている冊子である。

一三年前にいただいた「母から娘に伝えたい上伊那の郷土料理」（ＪＡ上伊那編纂）。百九十ページの濃い中身は、四季折々の食材の地産地消・安全が売り文。いつどのページを開いても明治生まれの母の笑顔が紙面を埋めてくれてこころふるえる。

時を経て、昨年暮れに「和食・日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産として世界に認められた。上伊那郷土料理はまさにそのど真中の食文化であると自慢したい心意気をお持ちの御仁が多いと思う。伊那の先達は、それほどに中身が濃く、地味ながらも深みのある食文化を継承されてきたのだと改めて頭を垂れる思いである。

しかし、日常の食は、時間がないとか子供が好まないとかを言い訳でもあるまいが

「和」よりも「簡」で済ましているのではあるまいか。今こそこころにゆとりを持ち「和食」の価値をそれぞれの日々の足元から見直したい思いである。

もとより「和食」の真髄は、食材・出汁に象徴される調味料などが大切であることはいうまでもないがそれだけのテーマではない。食に関する「作法」はもとより、その作法の意味するものや、盛り付け食器のあしらい、和食のもつ素晴らしさの発信力、次世代への食育など、たゆまぬ継承努力が求められる。伊那の先達は地味なれどもこれらの継承に務めてこられたと、この冊子が語りかけている。

東西の雄大なアルプスに抱かれ、山々に見つめられている伊那の地がそこに繰り拡げられる自然が生み出してくれる季節ごとの恵みを上手に「食」の世界に取り込んで行けることがなんと素敵な発信力であることか。「和食文化が世界遺産登録」のニュースは、これら郷土の食文化を伊那そして近隣、信州全域へと広く地域協同力で動かしていける時の到来であろう。信州には「寒天パパ」をはじめ優れた食文化発信企業が東西南北に頑張っている。「信州食文化継承会議」のような夢創造体を立ち上げてほしい。地域に中核を創り、「食」に関わるサービス業の皆さんはもとより市民がそれぞれの「和食」の輪創りに連携して、四季折々の「お・も・て・な・し」に勤めれば、世界に羽ばたくチャンス到来である。

こうした想いを冊子「上伊那の郷土料理」が訴たえてくれている。

さあ、皆さん始めましょう。

（元東京ガス㈱環境担当顧問）

家が除染されました

伊藤　喜良

昨年の晩秋に福島市内の団地に存在する我家も除染なるものが行なわれました。この除染は福島市が段階的に行っているもので、市は何年もかけてこの作業を行っていくようです。市内の除染率はまだ二〇パーセントに届いていません。我家は早いほうですが、放射線が高いほうから行っていくという市の方針からして、あまり喜べません。除染により敷地や家屋の放射線が少し下がったことは事実です。また除染の作業をした人達は手間隙かけて丁寧に行っていただきました。その点では敬意を表します。この作業の後、隣から日曜日に子供の声が聞こえるようになったのは新鮮な気持にさせられることです（ただし、日曜日だけで、他の日はまだ避難しています）。

除染という莫大な金と手間をかけてようやく居住できるようになった私のようなものはまだしも、県内には故郷を追われ、異郷で死を迎えようとしている（迎えた）人々が多くいます。また汚染水等をはじめとする原発廃炉処理が遅々としてすすんでいないことも周知のところです。このようななか、適当な理由を付けて原発の再稼働を声高にとなえる「原発ムラ住人」が蠢動し始めていることも事実です。

かつて福島大学に赴任する前の大学である友人（後に一橋大学に転勤）と原子力発電所について、「必ず事故は起こる。日本から少しでも遠い所で起こって欲しい。そうなれば必ず人類はそこから教訓を引き出すだろう」と述べていたところ、旧ソ連で事故が起り、なんとなく「ホッ」とした（たいへん不謹慎ですが）記憶があります。また、その大学から福島大学に転勤するときにある女性教授から「福島は原発のある怖い所だから気をつけて」との忠告をいただいた。その時は随分オーバーなことをいうなあと思ったのですが、今となればまったく的を射たものであったといえます。日本は火山と地震の国で災害列島です。歴史的には大震災を繰り返しており、そのような震災から立ち直ってきたのが日本です。原発立地の地層にある断層について、活断層かどうかが問題となっていますが、大地震、火山噴火の多い災害列島日本ではこれからも必ず原発事故は起こります。いったん起こったら取り返しがつきません。今回の福島原発の事故も、幸運がなければ東京も壊滅状態、死の街となったであろうことは疑いないところです。

家族は横浜市内に住んでいます。それゆえ、友人たちは福島大学を退職しているので、福島を引き払うのではないかと思っていたようですが、県議会が全会一致で原発に反対している福島県に住み続けようと思っています。今後も原発の動向を見続けようと思っています。

（福島大学名誉教授）

ふるさと寸描

伊藤　延司

三年前の五月、ほぼ五十年ぶりに母校の運動場に行ってみた。たまたま田原の実家（伊那市東春近）に帰った時、「田原地区運動会」という催しに誘われたのだった。

運動場は小学校東側の段丘にある。昔は小中学校共用の運動場で、僕たちは「上庭」と呼んでいた。今は市営運動場になっている。中学では野球部だったから、放課後になると、崖道を駆け上がり、土塗れで練習した庭である。

田原地区運動会は毎年五月の連休のころ、子供からお年寄りまで三代参加で催されているが、地区単位でこんなことをするところは、伊那谷でも田原ぐらいのものらしい。

「ムラ中がまとまって運動会をやるなんて、他にあるかえ？田原って、面白いとこだなえ」

運動場に隣接するマレットゴルフ・コースの休憩所から、大人子供入り混じってワイワイやっているのを、呆れ顔で見ていたおじさんたちが言った。僕も、田原ってつくづく面白いところだ、と思っている。

おじさんたちがタバコをふかしながら話しているのを聞いて、僕が思い出したのは、ここで一緒に練習した野球部の仲間ではなく、なぜか「鍛冶屋の文男君」と「菓子屋の一二三君」だった。幼なじみが懐かしかったわけではない。おじさんたちの呟きから、文男君と一二三君の家の屋号が不意に思い浮かんだのだった。

東春近村が伊那市に併合されるころの田原は、百五十戸ほどの集落だったと思う。天竜川がいきなり川幅をせばめる伊那峡に、押し込まれたように逼塞している集落に、油屋、織屋、紙屋、紺屋、石屋、鍛冶屋、菓子屋といった昔の家業が、屋号に名前を残している。

子供のころは、何げなく口にしていた屋号だが、最近は、こんな小集落に一通りの職業が揃っていたことを、面白く感じるようになった。様々な職種の屋号に、自己完結型の村の跡を見る思いがするのだ。

上の段の松林に「山の庵」という茅葺きの尼寺があった。子供のころ、落ち葉かきをする作務衣姿の庵主さんに、優しく声をかけられた記憶がある。下の段にも「お薬師」という尼寺があった。こちらの庵主さんは坊主頭にスカーフをかぶり、花柄のワンピースを着て、しゃなりしゃなり歩く派手な尼さんだった。

二つの尼寺は今でも建物だけが残っているが、庵主さんはもういない。

田原地区の菩提寺である曹洞宗崇福寺に、「葷酒山門に入るを禁ず」の石柱と並んで、田原村学校跡地という石碑が立っている。祖父は田原村の小学校に通ったと言っていた。石碑は田原が東春近とは別の村だった証である。

毎年四月、氏神の「白山神社」のお祭りがある。宵祭りには、神社の舞台で、若いお母さんたちが合唱したり、保育園児たちがお遊戯したり、おばあさんたちが伊那節を踊ったり、おじさんたちが「伊那の勘太郎」や「義士踊り」を演じたりしている。

スマホの時代に、勘太郎さんでもあるまい、と揶揄する人もいるが、田原の人たちは結構楽しんでいるのだ。

マレットゴルフのおじさんたちが「田原って面白い」と言っていたのは、こんな一体感を指しているのだと思う。むずかしい言い方をするなら「共同体意識」というやつだ。共同体の歴史が、屋号や寺や神社にしっかり残っている。一体感は、そんな風土から湧き出るのだろう。

鍛冶屋の文男君は大工の棟梁になった、と聞いている。

（翻訳業・ＡＦＰ日本語サイト編集顧問）

冬は凍みても

井口　武雄

ストーブの薪運ぶ子ら山高し

仙丈、東駒、西駒が頂から白くなり始める頃の小学校のある日であった。

三十センチくらいに切った薪をみんなで校舎の軒下に運び積み上げて冬に備えた。冬のストーブは教室の主役。弁当温め棚で半分囲み、上には大きな薬缶がのる。お昼近くなるとお葉漬けの臭が教室中に拡がった。誰のお弁当にもお葉漬けが入っていた。

高い山を見るには雪の時が良い。近くの山は紅葉時が良いのではないか。赤や黄の山が伊那全体を明るくしてくれる。夏の山も良いが高い山も近くの山も同じ緑で見分けがつきにくい。夏の山は登るに限る。

去年の夏、仙丈の頂上に登ることが出来た。途中であきらめなければならない不安を持っていたけれど。雲一つ無い天気で手前の高遠の街、天竜川を挟む伊那の街が飛び込

みたくなるように眼下に広がっていた。少し雪の残る西駒や宝剣には手が届きそうであった。

伊那の地には凄い景色に加えて優しく逞しい人々が生活し働いている。俳句を詠み、伝統芸能を守る文化も溢れている。稲を育て、野菜を育て、果物を育てるのも伊那の文化と言えると思う。俳人井上井月が江戸時代の末期から三十数年も伊那に滞在し家々に俳句を残したのはこのような文化に惹かれたからに違いない。毎日好きな酒をもらい、食事と宿を求めることが生きる術であったとしても、俳句の文化が無ければ、いずれかの時に他の地に移ってしまったであろう。育てることには苦しみや辛さがある。しかし、緑の田圃、黄金の田圃をつくり、瑞々しい野沢菜や白菜の畑をつくり、真赤なりんごが陽に輝く果樹園に仕上げるのは産業の一言で片付けてしまうことはできない。

このような伊那を伊那の人達だけで独占していては余りにももったいない。おしい。

（三井住友海上火災保険株式会社
シニアアドバイザー）

古代人の技術

江副　行昭

古代シリアで、フェニキアの旅商人たちが、ベールス川の河原で、食事の用意のために「かまど」で火を焚いたとき、それまで見たこともない光り輝いた半透明の液状体を発見し、それがガラスの起源であると「プリュニウスの博物誌」に書かれています。

このような伝説的な記録から、真偽のほどは分かっていませんが、約五〇〇〇年前ごろからあったといわれています。

ロマンに充ちた美しい装飾品や器類など、先人たちが残していった数々の贈物に敬意を表し、ガラスの複雑な「プロセス」を当時の近い条件で、臨床解明できれば、フェニキアの科学者、ガラス職人は浮かばれるに違いありません。幸いにも、今夏、実現する運びとなり、先人たちが長期に亘り、悪戦苦闘して、畏怖し、驚愕したガラスの妖精たちを、いずれ手にすることができるのではと、今からソワソワしています。

かれこれ十年ほど前の八月初め、気の合った九人のキャンパーと三峰川の支流の河川敷に、野宿することになりました。久々のアウトドアでの夜明かしは年に関係なく結構楽しめるようです。心懸けがいいのか天気にも恵まれ、パーティの一人がベテランとあって、てきぱきと仕切り、テントの設営や焚火用の流木集め、食事の準備やら至りつくしには感心しました。やがて焚火を囲み、宴もさなか、八月初旬とはいえ夜の戸台口の渓谷は急に冷え込み、多めの流木を用意していたので補充そのとき、フェニキアの旅商人たちが偶然にガラスの発見をしたときもこのようなシーンがあったのではなかろうか。この独りよがりのシナリオが、見当違いに終わらぬよう万全を期して、これに当たります。

私のガラス創作も今年で六十周年の節目でもあり、やり残しているものはないか今一度総ざらいをすべきだと考えています。

（ガラス工芸家）

『信濃の国』余話

蟹澤　聡史

小・中学生の頃、運動会などでは『信濃の国』が唱われた。学生時代には、あまり興味もなかったが、年とともに懐かしい歌の一つとなった。同級会でも締めは子供の頃に染みついた『信濃の国』なのだ。私も含めて、長野県生まれの人は、ほとんどが「信州生まれ」あるいは「信州人です」と自己紹介する。戦後、新制大学発足のときに、長野県だけは県名ではなく「信州大学」になった。それ程、「信州」あるいは「信濃」という言葉に愛着がある。

一昨年八月、朝日新聞「声」欄に、子供の頃太平洋戦争のため疎開していた信州上田で「信濃の国」を覚え、今では心のよりどころになっているという方の投稿が紹介されていた。短い期間だったが、心は今でも長野県人だとの内容に心を打たれた。そんなこともあって、新聞社に問い合わせてご本人とも連絡が取れた。さらに長野県庁に問い合わせて、県内における最近のこの歌の様子や歌の成り立ちなどの文献を知らせて頂いた。その中に、太田今朝秋さんの纏められた「県歌『信濃の国』の誕生―県民愛唱歌の今と昔―」という冊子があり、『信濃の国』が愛唱される経緯やエ

ピソードが書かれていた。その後、太田さんから更に詳しいお話を頂いた。昭和二十三年の県議会で起こった「分県論」の際にも、議事堂と傍聴者との間で「信濃の国」が唱われて、分県の議論は帳消しになったこと、昭和四十三年の冬季国体のときに、県民の中から「信濃の国」の大合唱が起こったことなどを知った。

ところで、信州と宮城県とはいろんなところで繋がりがある。若き日の藤村が、東北学院の教師として赴任し、仙台で『若菜集』を編んだ。相馬愛藏の妻黒光は宮城女学校の出身、東北帝大初代学長沢柳政太郎、七代熊谷岱蔵、十六代大谷茂盛も信州の生まれである。また、伊那に限っても縁が深い。幼少の頃、高遠で育った保科正之が会津藩主となったためでもあろうか、高遠蕎麦と銘打った蕎麦は会津だけでなく、宮城県にもある。南箕輪にある西天竜開田記念碑の石は何と宮城県の稲井石を戦時中に運んだという。昭和十九年の敗戦の色濃い時期に、なぜ石巻からはるばる取り寄せたのだろう。いろいろな因縁もあって、『信濃の国』は忘れられない歌である。

（東北大学名誉教授）

「伊那市の歌」と「春富中学校の音楽」

上岡実弥子

昨年十一月、東京で開かれた「まほら伊那の会」に伺いました。

会場に着くと、すでに多くの方が和やかに歓談していました。私は初めて参加したのですが、こんなに多くの伊那出身者が東京近郊にいらっしゃることに驚きました。伊那市からは、白鳥市長様を始め、各界の名士がお越しで、伊那出身者を大切に考えて下さっていることがわかりました。

会場内は「東春近」等地区ごとに分かれ、地酒がふるまわれたり、くじ引きがあるなど、大変盛り上がりました。

途中、皆で「伊那市の歌」を歌う場面がありました。

私は、正直「歌えるかな?」と不安でした。でも、イントロが始まると「あ、この曲ね!」とすぐ思い出し、難なく歌えました。それだけでなく「…これ、かなりいい歌じゃない?!」とじんわり感激してきました。

県外で「信濃の国」を歌うことはあっても、「伊那市の歌」を歌うことはまずありません。馴染んだ歌は、何年経っても自然に口ずさめるものなのですね。

ところで、私は春富中学校の出身です。

当時の学校では、お昼になるとポールモーリアの「恋はみずいろ」「オリーブの首飾り」が流れました。今でも、これらの曲が流れると、給食のワクワクした気持ちを思い出します。多くの人は「オリーブの首飾り」でマジック（手品）を思い出すそうですが、私にとっては、誰がなんと言おうと〃給食の曲〃なのです。

また、下校時になると、カーペンターズの「イエスタデイ・ワンス・モア」が流れました。今でも「When I was young…」という出だしを聴くと、夕方になった錯覚に陥り、「家に帰らなくては」と感じます。

この〃給食の曲〃と〃下校の曲〃は、パブロフの犬よろしく、私に「さぁ昼だ!」「そろそろ帰るか」という条件反射をもたらします。

「伊那市の歌」は、伊那を思い出し、伊那出身であることが誇らしく感じられる歌です。私にとっては、全国で頑張る伊那出身の方々を思い出す、そんな条件反射をもたらしてくれそうです。

（株式会社キャラウィット代表取締役）

いま評価されている信州伊那小学校の教育

唐木　浄治

昨年の暮れごろ、突然「産経新聞社」から唐木国際特許事務所あてに一通のファクシミリが送信されてきました。

それによれば、「本日は、唐木浄治先生のご出身小中学校への子どもニュース提供の件でご協賛の相談をさせていただきたく、大変失礼とは存じますが、ＦＡＸをお送りさせていただきました。本企画は、青少年健全育成キャンペーンと連動し子どもたちの情操教育に役立ていただきたくことをねらいとし、毎週子どもニュースを学校にお送りしていくものでございます。ここに企画書をお送りさせていただきますので、ご高覧いただき、ぜひご協賛いただけますよう勝手なお願いにて大変失礼でございますが、よろしくご検討の程お願い申し上げます。」とのことです。

この青少年健全育成キャンペーンは、独立行政法人国立

青少年教育振興機構で構成された学校の産経こどもニュース「育てる子どもたち」の提示用パネル（添付ファイル付）を、全国の小学校・中学校・幼稚園・保育園・養護施設などに対し一年間分を提供することになっております。そして、協賛金一口五万円を集めて、その一部を「子どもゆめ基金」に寄託することになっています。

ところで、産経新聞社とは全く係わりのない弁理士の私のところに、このような協力要請があったことについて伺ったところ、私の伊那小学校での体験、都庁での青少年健全育成行政にたずさわっていたこと、発明協会の知的財産権の支援活動に長年たずさわってきたことなどによる深い知識と貴重な経験によりますことが評価されたようであります。

すなわち、文科省の外郭団体であります「工業所有権教育用副読本策定普及委員会」へ発明協会から推薦された委員として、長野県伊那市立伊那小学校での多くの体験を広く普及されたことで、高く評価されて私に投稿依頼があったようです。

このような研究成果が「黄綬褒章受章」の対象に選ばれ、その際の記念誌である「過去の記録で綴る我が半世紀」が、県立長野図書館から寄贈の依頼があり、永久保存されることになりました。とりわけ、戦後の知識の詰め込みによってもたらされた学校及び家庭の崩壊により子どもたちを非行に追い込んできたおとなたちの責任が問われる今日、一日も早く子どもたちが楽しい学校生活を取り戻すことができる環境を整えることが先決のような気がしてならないことは、私だけではないと思います。

最後に、文科省の中央教育審議会（中教審）において、現行の教育基本法の改正に伴い「教育指導要領」を全面改正しようとしていることがマスコミの脚光をあびているせいか、平成二十六年一月四日付の朝日新聞（朝刊）に「結果だけの通知表ノー」という大きな見だしで、伊那小学校においてすでに通知表をやめていたことが、大きな記事になっておりますことをあえて付記します。

（弁理士）

「資源の呪」への挑戦

北原　巖男

⑴「資源の呪」という言葉を聞いたことがありますか。

日本のような資源小国と異なり、石油や鉱物、天然ガスなどの天然資源に恵まれた国では、資源をそのまま輸出することによって莫大な外資をいわば安易に獲得できます。

このため、資源に頼らない工業化や生産性を高めて行こうとする真剣な取り組みが怠慢になりがちです。また、そうした国では、為政者などが天然資源の恵みを独占し続けようとしたり、汚職もはびこり、貧富の差は拡大を続け、多くの国民は貧しいままの生活を余儀なくされます。内乱もしばしば生起し、安定的な経済発展はとうてい期待できません。

このような現象を総称して「資源の呪」と言います。

テロや騒乱などがニュースで伝えられる資源国には、この現象に陥っている国が多いと思います。

⑵二十一世紀最初の独立国東ティモールはどうでしょうか。全国土面積は長野県ほど、人口はおよそ半分のアジアで最も新しい国ですが、実は大変な資源大国であり、資源小国日本にとって大切な国なのです。

東ティモールが、オーストラリアとの間のティモール海で算出している年間３００万トンの天然ガスは、全て日本向け。日本の天然ガス総輸入量のおよそ４％を占めています。

⑶そんな東ティモールの為政者は、当初から「資源の呪」への挑戦を続けています。

限りある天然資源の売上げ金を「石油基金」として全額積み立てています。毎年その一部を法律と国会の審議に基づいて、現在そして次世代の国民のための継続的かつ効果的な国づくりに使用、その管理、執行、決裁等について絶対的な透明性を確保し、汚職防止などにも徹底を図っています。

現在、東ティモールにはこれといった産業がなく、国家収入の80～90％はこの「石油基金」からとなっています。

このような状況を改善するため、全国各地の国民の意見も聴取し、国会の議決を経て策定した「戦略開発計画」に基づいて、国の基盤となる人材の育成に力を注ぐとともに、非石油・天然ガス部門の工業化を図り、観光分野の強化・充実そして農業分野での生産性の向上等に邁進しています。

合い言葉は、「経済支援から経済投資へ」

確かに問題や課題は沢山ありますが、東ティモールは、平和の中で自らの足で国づくりに取組んでいます。重く大きな車輪は、とてもゆっくり

ですが確実に少しずつ動き始めています。

⑷ちなみに東ティモールは、日本と同じ日出づる国。人々は自分の国をＴＩＭＯＲ－ＬＯＲＯＳＡＥとも呼びます。公用語のテトゥン語でＬＯＲＯは「太陽」、ＳＡＥは「昇る」を意味します。さらにテトゥン語には「伊那」の発音と同じ「ＩＮＡ」があります。「ＩＮＡ」は「カアチャン」です。伊那はお母さんなんですね。

ふるさと伊那市の皆さんには、そんな東ティモールを是非身近に感じていただければと思います。そして願わくは、「そうだ　東ティモール　行こう」です。百聞は一見に如かず、皆さん自身の「これが東ティモール」を発見してください。

参考http://www.lorosae.org

（前東ティモール日本大使、日本東ティモール協会会長）

ふるさと片々

北原　進

昨年の進徳館の日（五月二十五日）に、高遠閣で、江戸における保科正之公の業績について、講演をさせていただきました。内藤様をはじめ藩史に残る名家の方々の居並ぶ中で、やや緊張せざるを得ませんでしたが、大変名誉な機会を与えていただいたものと感謝しています。

もっとも話の内容は、必ずしも正之公の経歴には沿わず、江戸が幕藩体制史の中で、近代の首都に比すべき中央政治都市となり得たこと、そこには正之公の周到な都市計画が働いていたことなどを念頭においていました。現在はこれを、徳川氏の関東経営や、東北・北陸経営を見渡した会津移封にまで、拡げて考えられると思っています。しかし思いばかりが先走り、説明できるようになるのは、まだ先の話です。

高遠講演に先立ち、信濃毎日新聞による伊那市での講演会もありましたが、ともに高遠歴史館の北原紀孝館長にご配慮いただき、深く感謝しております。氏も私も、実は長藤・中条つながりの歴史屋です。しかし東京生まれ・東京育ちの私の「伊那ふるさと」経験は、太平洋戦争中に縁故疎開していた二年間に過ぎません。長藤国民学校時代の友人の中には、今も年賀状を下さる方もいますが、もう七十年近くも昔の話です。

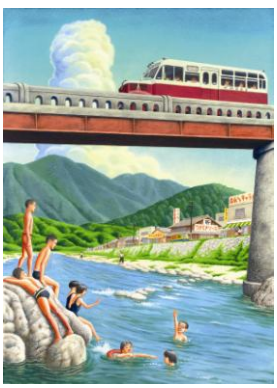
（立正大学名誉教授）

コレクションの中の両親のふるさと

北原　照久

僕はブリキのおもちゃコレクターだと皆さんに認識していただいています。横浜に最初の博物館を開設したのが二八年前のブリキのおもちゃ博物館だったから、そして、テレビ番組でブリキのおもちゃを観る専門家だからでしょう。ブリキおもちゃは集めたものの中のほんの一部。時計、ラジオ、広告ポスター、商品パッケージなどの生活骨董から現代作家が制作するアート作品まで、多分野にわたる多種多様なものをコレクションし、常設の博物館に展示できないものを倉庫で保管しています。

高遠でもコレクション展示をさせていただいたように、各地の博物館やイベント会場で、それらを展示することがあります。年頭には島根県の百貨店で、僕もコレクションしている現代作家・毛利フジオさんの作品とコラボレーションした企画展「昭和のコレクション展」を開催しました。毛利さんは主に昭和三〇年代の懐かしい風景を描いているのですが、記録写真とは違う温かな風景画です。おもちゃやマンガ、雑誌、レコードなどと一緒の展示は、今まで以上に懐かしさを味わっていただけたようで好評でした。僕自身が子どもだった頃の思い出を伝えて描いてもらうこともあります。これは母のふるさとである高遠を描いたもので、天竜川にかかる橋にボンネットバスが走り、子どもたちが川で遊んでいる情景。母はこの絵が大変気に入り、絵を見ながら当時の思い出話をまるでつい昨日のことのように語ってくれたものです。母のふるさと高遠、父のふるさと新山を、イラストを見ながら僕も親しく感じます。母との思い出も書いた自伝「出会い　夢　感謝」も上梓。両親のふるさとを想いながら、今年も「関心、感動、感謝」の三カン王で進んでいきます。



（㈱トーイズ代表取締役、ブリキのおもちゃ博物館長）

イチゴ事件

河野　實

古希を過ぎた老人が、想い出話を書く。

ボクはフリーになるまで、経済誌に勤めていた。一記者から副社長まで上り詰めた。

そのオーナー社長（＝以下主幹）から、相談役の升田幸三氏に、相談役手当を盆暮れに届けるように命じられていた。升田幸三氏はプロ将棋に三冠しかない時代に、最初に三冠王を獲得した棋士だった。その鋭い差し口は鬼才と呼ばれ、自らは「新手一生」を掲げていた。

昭和の末期、升田邸のある最寄り駅西武新宿線鷺宮駅横の青果店で、箱入りのイチゴを購入して、手土産に持参した。

翌日、出社するとすぐに主幹室に呼ばれた。「昨夕、君は升田相談役に手当を届けるときに、腐ったイチゴを持っていったそうだな。二度と、勝手に手土産など持っていくものではない。果物を持っていく場合は、銀座千疋屋か三越のフルーツコーナーで買うのだ」

つまり、ちゃんとした店で購入して、同じことが起これば、一流人は買い求めた店に「暖簾をたため」と迫るという。ところが、ボクは、升田邸の近くの場末の青果店で求めたので、青果店ではなく、送り主をとがめてきたという。

不手際は、早く取り返した方がいい。翌朝5時起きして、自宅の逗子から、家内の実家近くの三浦海岸まで、車を飛ばして、寒ワカメを岩場に拾いに行った。冬の海は、まだ薄暗かったが、懐中電灯をつけて、岩場に打ち上げられているワカメを拾い集めた。帰宅して背広に着替えて、すぐに横須賀線に乗った。朝食の味噌汁の具に間に合うように、鷺宮の升田邸に採りたての寒ワカメを届けた。

升田棋士は主幹に電話をかけてきた。

「河野副社長は、ただ者ではない。大事にしてやれ」

一流人は、叱るときは叱るし、褒めるときは褒める。ミスをすぐにカバーした「イチゴ事件」は、後世まで語り草になった。（詳しくは近著「マコは生きた！」に）

（ノンフィクション作家）

「フクシマ」に想う

小松　豊彦

私は昭和四年の巳年生まれで昨年は84歳の年男でした。社会人の第一歩は福島でした。勤務した会社が家族的で、「節分の豆まき」は男子寮の24歳になる年男達でした。工場内、研究所、独身寮、社宅の各戸を回り、豆まきをしました。終わって食堂で節分の馳走と熱燗で、寮の先輩、後輩との会食で、絆が深められました。今はやらなくなりましたが昭和二八年、61年前の思い出です。

未曽有の東日本大震災、福島はそのうえ原発事故の放射線被曝に苦悩しています。被災地と仮設住宅には両陛下を始め皇族の方々、スポーツ選手、芸能人、さらに海外からも多くの人々の訪問で励まされ、元気と力をもらいました。が、復興計画は全くスローです。

「フクシマ」はマスコミの報道で国際的にも通用する言葉となりました。オリンピック誘致のスピーチで、安倍首相は原発の汚染水漏れについて「完全にコントロールされている」などと強調されましたが、現在も次々と汚染水漏れが発生しています。放射線の除染は当初3年で終わる計画が見直され、さらに3年先へと延びて、東電から政府環境省管轄へと変わりました。

私の住む福島市は原発から約60㎞離れ、当初の放射線は1ミリシーベルト前後でした。現在は0．5ミリシーベルト以下となっています。やっと仮設置場が決まり、本年度は側溝と通学道路の除染ができます。個人宅の除染物は屋敷内に仮り埋設しなければなりません。除染が早く完了することを願っていますが、未だ除染計画が示されずに転居している多くの帰還困難区域の人々がおり、脱原発は必然のことだと思います。

昨年東北で印象深かったのは、東北楽天ゴールデンイーグルスが、東京読売ジャイアンツを迎えた日本シリーズで優勝しました。復興に向けて苦闘する東北の人々に大きな励ましとなりました。このことは、俺たちも皆で協力・努力すればできるという勇気を与えてくれました。

一日も早く「フクシマ」が安住の地となることを願っています。

（日新製薬（株）顧問）

八十一歳で国民学校の同級会

酒井　汀

昨年三月末、手良小学校の同級会に出席した。一別以来初めてという人も含めてほとんどが何十年ぶりの再会であった。在校時は東組、西組の二組で計八十人ほどだったが、出席者は十八名で、東京方面や名古屋から、そして関西から私などが混じった。

みんな今風の後期高齢者であるが・・・

四年生のときから国民学校と改称され、その十二月寒い朝礼で校長から大戦の始まりを聞いた。六年を終えて、少数の者が旧伊那中や上農などへ進学して別れた。

当時の手良は村だった。伊那町へ通学するようになった私にとって昔の通り町や入舟の繁華さが市街地のイメージの原型である。しかし学校は外回りの勤労奉仕作業ばかりで、二年生の夏、あの敗戦。進駐軍兵士と初めて路上で片言を交わし、通学路でジープと手を上げ交わして精神構造が揺さぶられた。その後、旭座や電気館の旧式な映画も楽しんだ。手良では空腹は覚えなかったが、京都に進学した当初は、食費が嵩む上に月に九十食のクーポン券を毎食ごとに出さなければならず、空腹を体験した。

生涯を転勤稼業で過ごし、京都の郊外で隠居しているが、この間の大変化は、誰も想像もしなかった。六道原が軍用飛行場になったときは学徒勤労動員で駆り出され、終戦まで飛行機が土埃を上げていたが、今は一面水田に変わっている。中央道や権兵衛峠トンネルの開通、町村合併。各家庭の電化、携帯などの普及。その反面というか、最近は野生シカによる農作物被害が起こっていることも聞いた。私どもの場合は、竹馬の友を懐かしむと同時に、どこで暮らした人も等しく巻き込まれ経験したこの大変動の回顧に彩られた。

折しも地元の人たちで編纂した「手良誌」の本をみた。内容は、手良地区の地理風土や古墳の発掘記録から民家の蔵に眠っていた古文書などの掘り起こし、また古い言い伝えの検証なども含めて、地区と庶民の立場からの歴史書である点が特長と見た。そしてこれも一農山村の庶民の歴史であると同時に全国の庶民史に通じる一モデルでもあると思う。幾つかの他地区でも同様のものが出版されていることを知り、ふるさと伊那を回想しています。

（帝塚山学院大学非常勤講師）

ドイツに学ぶ「バラまち」？

白井　温紀

書棚を整理していたら、森林のイメージについての、興味深い調査結果を見つけた。

一九七八年に森林文化研究会が行った、日本、ドイツ、フランスにおける森林についての住民意識調査だ。日独仏の自然観・森林観の国際比較である。調査にあたり日本では、北は旭川から、南は宮崎市まで、六都市が対象地に選ばれており、なんと、その中に伊那市の名前があった。

質問項目としては、森林に対する畏敬の念に関するもの、樹木についての知識、森林に人手を加えることの可否について等々、計十三問がある。それらに三国各地の住民が答えていて、なかなか面白い。森林に対する国民性が分かるというものだ。

たとえば「あなたが旅行するとしたら、どこへ行きたいですか」という質問に対して、「深い森、古い寺院、広い砂浜、高原の牧場、見晴らしの良い山、険しい岩山、静かな湖」といった選択肢が用意されている。ドイツでは半数以上が「深い森」を選んでいるのに、日本ではごく僅かで、フランスはその中間だ。

この調査結果について、世界的な湿地研究者が興味深いことを書いていた。曰く――日本人にとって森林は荘厳な存在であったろうが、ついに身近で親しい存在ではなかった。ドイツ・フランスの人々のイメージにある森と、日本の森とは、形も、中身も大いに違う。照葉樹林の復活も必要だろうが、より親しみやすい、明るい落葉樹林もまた大切にされるべきであろう――。

伊那市は、ドイツと同じ夏緑広葉樹、つまり、明るい落葉樹林の土地柄だ。フランスには、私が長く住んだ神奈川や東京のような常緑樹が主な地域もあるが、ドイツもフランスも、旅行先に「深い森」を選ぶという国民性があるらしい。伊那市と、遠く離れたドイツやフランスを、同じようには語れないが、少なくとも「落葉樹」という視点で、なにがしかの共通点があると意識しても良いのではないか？

たとえば、落葉樹を活かした庭づくりや、バラの楽しみ

方をドイツに学ぶなど・・・昨年十一月、「伊那バラまちフェスタ」という素敵なイベントにお招きいただいてから、ずっと、そんなことを考えている。

（ガーデンデザイナー）

伊那っていいな

鈴木　福

ぼくは、ほぼ毎年、冬休みは伊那に行きます。ひいおばぁちゃんが伊那に住んでいるからです。冬は必ず伊那スキーリゾートに行き、スキーやソリをやります。今年も親せきの人たち20人くらいで行きました。小さないとこと、キャーキャー言いながらのソリすべりは最高です。スキーも少しすべれるようになりました。

東京は伊那のお年取りのようにごちそうを食べないで、年越しそばだけ食べます。ぼくは、ひいおばあちゃんの家でごちそうを食べてから、常円寺にじょやの鐘を突きに行き、帰りには坂下神社で初もうでして、おもちや甘酒をもらったり、おそばも食べたりできるので、眠いけど頑張って行きます。アピタやゲームセンターに行くのが楽しいです。

夏の山もきれいだけど、特に冬は山に雪があって、とてもきれいです。秋は親せきのぶどう園でぶどう狩りをしたりします。いつも温泉に行くのも楽しみです。高遠の桜も小さい頃に見に行った事があるけれど、2才くらいだったのであまり覚えていないので今度、桜の時期に行きたいです。

ぼくの田舎は伊那市です！とじまんしてます。ホリデーレギュラーで出演しているフジテレビ「笑っていいとも」でも伊那の話をして、今年の伊那スキーリゾートでの写真が映りました。

伊那まつりは小さい頃におどりに参加したり、花火を見たこともあります。

伊那っていいな。

（こどもタレント）

いな生き生き環境プロジェクトの提案

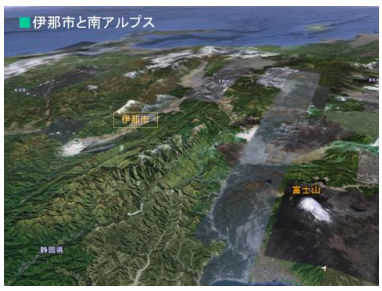
田畑　貞寿

わたしたち人間は、地球上のあらゆる生き物とその生き物たちが関わって生きていることをよく耳にします。一九三〇年代に育った仲間があつまって、クラス会などなどで、遅くまで杯を酌み交わしつつ、美味なつまみを噛みしめ出てくる話題は、おらが街、集落ごとの食べものの話題、そして遊び歩いた友人の家、庭、田んぼや畑，河原、山、風景等など、その場所をあげれば際限なく続く。でも一九五〇年代から随分生活面でも土地の使われ方も大きく変わったところ、少しずつ変化しつつあるところ、昔そのままのところもあるようですが。このような恵まれた自然環境で、衣食住を中心にした多くの文化が育ってきたことを実感する今日この頃です。さて、人が生きていくために必要な水、空気、エネルギー、食べ物、薬、服や家を作る材料などの採集できる空間・場所・土地の環境は、みな生き物や自然の中から探し求め暮らしてきました。私たちのまわりに住んでいた生きもの変化も多くみられます。三峰川、天竜川流域の食べ物、水、エネルギー、薬、材料・道具、産物、産業、遊び、仕事、子どもの遊び場、技術・知恵、行事・祭り、神様・神事等なども、昔のままのところもありますが。新しい試みもされています。

この生き物と生き物が織り成す自然、生き物のつながりから、私たちはさまざまな恵みをうけています。このことを「生態系サービス」と呼んでいます。最近これらに関係する市職員の担当の方に伺ったところ、五年前に策定した「環境基本計画」の改定に入っていて、次の策定では伊那市の「環境資産」や「生態系サービス」を含む「生物多様性―いな生き生き環境プロジェクト」について新たな項目を検討しているとのことでした。既に多くのプロジェクトを市民・専門家・行政の方たちの協働ですすめられているものや、ＮＰＯ法人や市民サークル・グループで実施されている事業も沢山あることを聞きました。そして、庁内の条例により策定される多くの計画の中で環境にかかわるプロジェクトは、各係すべてにかかわる項目と思います。是非市民、集落、団体ごとの皆さんに理解されるよう整理して戴き、市民の六感でとらえられ今はやっている言葉で「自然資産の保全」といわれる内容を掘り起こし、単なる観光地のイメージだけでない

「いな生き生き環境プロジェクト」実践のお手伝いができることを願っています。

（千葉大学名誉教授）



ただいま映画の撮影中

柘植伊佐夫

伊那市の皆様いかがお過ごしでしょうか。わたくしは日頃東京におりますので地元よりもいくぶん暖かな環境です。それでも先日映画の撮影で茨城へロケに参りまして、すこし東北寄りになっただけでも朝晩の冷え込みも激しいものでした。するとふと伊那の冬もこんな風であったかなと思い出されるものがありました。

今とりかかっている作品は、同じく長野県出身の山崎貴監督による「寄生獣（きせいじゅう）」というものです。いささかおどろおどろしい名前の作品ですが、ある謎の生物が人間に寄生し次々と人間を捕食していくという内容で、もとは岩明均原作の漫画です。以前、「タイタニック」で有名なジェームズ・キャメロン監督がこの作品の権利を買い、作中のアイデアを「ターミネーター・シリーズ」などに使いました。ハリウッドでの映画化の話もありましたが現実には至らず、権利期限が切れたのを機に日本側が買い取って今回の作品化が形になったという経緯があります。

この中でわたくしはキャラクター・ビジュアル・ディレクターという仕事を担当させていただいています。寄生獣のデザインから登場人物の衣装、ヘアメイクのデザイン全般を監督する仕事です。いわばこの映画の中に出て来る人々はどのような形であれ担当しているのですが、この撮影の準備を開始しましたのは二〇一三年二月頃でした。およそ一年近くデザイン作業をした末にクランクインしました。ここからおよそ5ヶ月の撮影期間です。どのような仕事も調査や準備、実作業、再点検、配給などのサイクルが関わるもので、自分のような表現の仕事をしながらも、なにか農作物をシーズン毎に出荷しているような気分になるものです。この作品は2部作で、今年の12月にパート1が公開されます。伊那市の皆様もぜひご覧下さい。

（人物デザイン／ビューティーディレクター）

名古屋の町づくりについて一言

登内　洋人

私は四十年余にわたり名古屋市に住み、その町づくりの一端に係わってまいりました。

第二次世界大戦では街の中心部はじめ焼土と化した中、終戦後の直後には将来を見通した戦災復興計画が策定されました。

また昭和三十四年には伊勢湾台風により、先のフィリピンの大災害にも匹敵する大きな被害をうけ、この地域では五千人を超す犠牲者も出ました。そんな中にあって、復興計画は着実に進められてきました。昭和四十年代に至り新たに都市高速道路計画が推進されるに至りました。時あたかも高度成長期であり、自動車交通が激増し、とくに環境問題について、市民の意識が急速に高まりつつある時代でした。この計画は長く厳しい反対運動のため、計画変更を迫られ、当初計画より相当な遅れを余儀なく進められざるを得ませんでした。

そして最初の都市高速道路の一部開通が昭和五十四年、最後の全線開通が平成二十五年十一月ですから、実に三十年余の時間を要した訳です。

昨年十一月二十三日全線開通の記念式典が開催されましたが、全長八一・二キロの最後の部分三・九キロは、東海道新幹線をまたぐ難工事であり、新幹線の最終列車通過後

の限られた短時間で工事を行う必要があり、真夜中の厳しいものでした。最初の一部開通時はその距離も十．九キロと僅かであり、通行車両台数も微々たるものでしたが完成後八一・二キロの利用台数は一日三十万台を超え、名古屋都市圏の自動車交通の要として重要な役割を果たしております。

名古屋都市圏は派手さにおいては若干欠けるところがあると指摘されているようですが、産業技術の中枢的役割を果たし国民総生産の約十％を担い、また、大きな取扱量の名古屋港、そして中部国際空港などが有機的に相乗効果を果たしていくであろうと考えています。長期的には相当有望な地域であると言えると思っています。

（元名古屋高速道路公社理事長）

武田松姫のことなど

中村　彰彦

ＰＨＰ研究所の刊行する月刊誌『文蔵』の昨年十月号から、長編歴史小説「疾風に折れぬ花あり」の連載を開始した。

主人公は武田松姫、のちに出家して信松院と称する高貴な女性である。その父の名は武田信玄というと、甲府を舞台とする作か、と思う方もあるかも知れないが、さにあらず。

私は松姫の一生を描く予定の拙作の第一章の舞台を、戦国時代の伊那市高遠町とし、章題を「高遠城の姫君」とした。

織田信長・信忠父子の率いる大軍が木曽谷を経て高遠城へ攻め寄せたのは、天正十年（一五八二）初めのこと。時の武田家当主が四郎勝頼、高遠城主がその異腹の弟・仁科五郎盛信であったことは、よく知られていると思う。当時二十二歳と花の盛りだった松姫は仁科盛信の同母妹であり、ふたりはとても仲が良かった。

松姫が高遠城に遊びに来ている間に、織田の大軍が木曽谷から接近、危険な状況になったため、松姫はいったん韮崎の新府城へ帰ってから笹子峠を経て八王子へ脱出する。その寸前の三月二日、いわゆる「高遠合戦」が起こって仁科盛信とその配下二千五百八十人あまりが討死するのだが、よく調べると織田軍の戦死者は二千七百五十人あまりと、籠城戦をこころみた仁科勢より百七十人ほど多い。

仁科家の将兵はひとりが敵ひとり以上を倒してから討死したことになり、これは信州武士団の強悍さと団結心をきわめて雄弁に物語っている。この「高遠合戦」については『桶狭間の勇士』（文春文庫）の第六章「五郎山に眠れ」で描いたことがあったのだが、それは織田家家臣の視点に立ったものだったので、今回は高遠武士団の視点から語り直してみたのである。

なお松姫は髪を下して八王子の信松院に行ない澄ましてからは、お静の方が保科正之を無事出産できるよう力を貸している。今も信松院にあるその木像は、本当に美しい。

（作　家）

人と栖（せい・すみか）、環境の記憶と対応

中村　三郎

地盤災害は、当然のこと乍ら人と自然との接点において発生する現象であります。被災の地域や災害の時期について必然性あるいは意外性が考えられますが、この両面に関わる追跡は今日の私達にとって大切な作業目標でもあります。

二〇一一・三・一一の東日本大震災、最近の伊豆大島における大規模土石流災害、かつて信濃路では、一九六一年「伊那谷の三六災害」・一九八五年「長野市地附山地すべり災害」等で経験した悲惨な被災事実は、私たちに貴重な教訓を与えてくれています。加えて最近は東南海地震の予兆、気候の温暖化にともなう異常豪雨などによる大規模な地盤・河川災害などの話を聞くと不安に駆られます。

近年、私達の身辺では、生活の進展による人工的な地形の改変や構築などが著しい。特に一九六〇年代（一九六四年東京オリンピック、高速道・新幹線の開通）以降における都市域の拡大にともなう宅地造成や道路の構築など、土地利用の変貌が著しく「自然社会の環境」に大きな変化が展開しつつあります。地域の変貌は私たちの自然観・環境観・価値観などにも影響を与えています。

「方丈記」冒頭文中のことば「人と栖（せい・すみか）」の意は防災上なじみ深い、最近の異常気象・地震と大災害の報道を聞くと「災害も自然

社会」という環境が醸成されつつあるということも容易に考えられます。いわば「人間の都合優先」の生活展開の結果でしょうか。しかし自然は人間の理解を超えた現象をしばしば露呈し、これが思いもよらぬ自然災害をもたらしています。いわば「計り知れない自然の都合」の追跡不足と云うことも考えられます。

後氷期・縄文期以降の温暖期には大小規模多数の緩傾斜面（地塊）が形成されています。平地の少ないわが国では、この種の地形域は古来格好の生活面（集落等）・農耕地等として利用されております。このごろ頻度多く経験する時間雨量八〇～一〇〇ｍｍ以上の異常豪雨等の継続は、上記緩傾斜面形成当時と類似の気候環境条件に近くなりつつあるということもあり、最近この種の地盤帯が不安定化し大規模崩壊を誘発しています。かつての地附山・大西山大崩壊はこの一例であり、いわば「縄文地塊の深層崩壊域化」ということも考えることが出来ます。今日の温暖化にともなう異常気象は、古来安定していた居住域としての斜面環境にとっても一つの危機でもあります。

南北・中央等のアルプスに囲まれ、類いまれな景観・風情に包まれた信濃路・伊那盆地・安定した「人と栖」との関わり、「アメニティー」の展開について私たち自身の努力の必要を思うこの頃であります。

（防衛大学名誉教授）

チンパンジーとヤギとカニ

野溝　友也

ここ何年か年末年始は海外で過ごしている。バカンスならば優雅だが、ボクの場合は取材が目的だ。昨年の正月はアフリカ・ウガンダで過ごした。国土の標高が平均一〇〇〇メートルを超えるため赤道直下ながら年間を通して気候は温暖な国だ。

エンデベ空港から首都カンパラには向かわず、ナイルの源流ビクトリア湖を眺め西に向かう。途中小さな村で車が停まる。「野溝さん、どれにするか決めてください」と現地のコーディネーターに言われ、見ると車の周りには痩せたヤギが三十頭ほど。そのなかから三頭を決めた。これからしばらく、ボクたちの夕食となるのだ。

取材の目的はウガンダの森に暮らす野生のチンパンジー。毎日移動を続けるチンパンジーを追いかけて二週間。泥沼にはまり、橋のない川を渡り、したたる汗に眼をしばたかせ、道など無い森の中を毎日二十キロ以上撮影しながら歩く。荷物を運ぶため雇ったポーターが、どう見ても子どもなので年齢を尋ねたら十二歳。ボクの娘と同じ年だ。ボロボロの靴で十数キロはある撮影機材を担ぎ、それでもお腹に大きな荷物を蓄積しているボクよりも足取りは軽い。

人間が作ったものなど何も無い原始の森に身を置く。自然の中に溶けていく感覚だ。と、ポケットに入れていたiPhoneの着信音が響く。電話は生命保険の更新を知らせるものだった。いきなり現実に引き戻される…。森の中でも日本の大学が研究に使用する目的で近くの山に中継基地を設置したので電波が届くのだ。取材の邪魔をされたくなかったのでボクは電源を落とした。

宿泊地に戻り夕食の支度の合間に携帯電話の電源を入れる。いくつかの留守電とメッセージに混じり、子どもを連れ伊那に帰省している妻からのメールがあった。正月に帰省できない兄は毎年実家にカニを送るのが恒例となっている。そのカニにかぶりついている家族の写真が添付されていた。

その写真を見ながら、ボクは娘と同じ年のポーターと並び、堅いヤギ肉にかぶりついた。

（テレビディレクター）

丸山公園の閉鎖

原　克

廃墟の美というものがある。断片（トルソ）の美しさといってもよい。

東京オリンピック前夜、丸山公園は人気の遊園地だった。ミニ鉄道がめぐり、タヌキがおり、ゴーカートが走る。桜もみごとだった。週末ともなれば、人波でごったがえしたものだ。

なかでも圧巻は飛行塔だった。鉄骨の柱が屹立し、鋼鉄ワイヤーでつるした飛行機が四機、空中高く回転する。子供たちは熱狂し、列はとぎれることがない。風を切って舞いあがると、世界を征服したような気分になった。

オリンピックを境に、伊那小学校に隣接するその高台には、人影がまばらになった。そして、かつての夢の王国は、ひっそりと閉鎖された。

オリンピックも記憶になるころ、わたしは小学校五年生になっていた。

放課後、丸山公園をぬけて下校するのが日課だった。ミ

ニ鉄道のレールは錆びつき、なかば土に埋もれていた。タヌキの檻も撤去された。ゴーカートの周回路は、いまやひびわれたコンクリートの台座にすぎなくなっていた。

もっとも無惨だったのは飛行塔だった。ワイヤーは切られ、飛行機は山積みされている。鉄骨の柱だけが、秋空につきささっていた。昔日のおもかげなど、どこにもなくなっていた。

しかし小学生は、廃墟と化した公園が大好きだった。

かつてレールがあった順路を、走ってまわった。檻の台座を、木ぎれで掘ってみた。コンクリートの道を駆けっこした。しかし、圧巻はやはり飛行塔の鉄骨だった。小学生には、無骨なそのシルエットが宇宙船になった。油が固まった巨大な歯車は、海賊船の機関室だった。

失われた過去を惜しんだのではない。いまは廃墟となった場所で、あらたな遊びをみつけたのだ。そのとき少年は、昔日をふりかえっていたのではなく、まちがいなく未来を遠く望んでいたのである。あのときの断片たちは、たしかに美しかった。

（早稲田大学教授）

「国際ユースキャンプ」はどうなっている？

松下　倶子

今年は冬季五輪開催年。会場はソチ。去る一月二十日には日本の選手団の結団式が行われた。冬季五輪と聞くと、十六年前の長野五輪を思い出す。競技そのものではなく「国際ユースキャンプ」のことである。社会的にはあまり知られていないようだが、五輪開催時には競技とともに「文化プログラム」と言われる行事があって例えば雪像コンクールや親善行事などが併催される。「国際ユースキャンプ」もその一つ。競技選手ではない青年達が世界中から集まって合宿し、五輪式典の見学、競技の観戦、環境、平和などをテーマとしたフォーラム、ホームステイなどの活動を行う。長野の時は軽井沢の日本大学研修所をキャンプの会場として五十一カ国から十五―二十歳の若者が二百三十人集まって十四日間生活をともにした。私はそのキャンプの村長を命じられたのだった。

長野五輪といっても競技や主だった行事の会場は北信、東信に集中していたので、伊那谷は聖火リレーが通ることと、まちを走る車にシンボルマークが付いていたことが「五輪の風」を感じさせてくれる程度だった。そこで私は村長を引き受ける代わりにユースキャンプの参加者の県内旅行のコースの一つを高遠行きにしてほしいと提案、受け入れられた。当時の北原三平町長を先頭に、役員方、町民方がこぞって歓迎の計画を進めてくださり、だるま市の飾りを一日早く設置し、さくらホテルで町主催の歓迎会を開いてくださった。キャンプ場に留まっていた私は参加できなかったが、このコース参加のキャンパー達が喜んで報告してくれたことで高遠コースが成功だったと知った。毎夜参加者が自国を紹介し、世界平和の実現をテーマにフォーラムを開いて宣言をまとめ、と寝る暇もないほどの活動をこなした。次の冬季五輪会場・ソルトレイクシティからの視察者もいたが、そこでの様子を聞いていない。今回はどうなっているのだろう。若者の交流の貴重な機会だと思うのだが。

（学校法人恵泉女学園学園長）

戦後民主主義を護れ！

丸山　敬一

国民の多くが反対している特定秘密保護法が二〇一三年十二月六日深夜与党（自民・公明）の賛成多数で成立した。一昨年十二月の衆院選、昨年七月の参院選で圧倒的多数を得た与党の数の暴力による強行採決であった。その際明らかになったことがいくつかある。

①かつて自民党内にあって暴走にブレーキをかけていた保守の良識派というものが全くなくなって安倍一色になってしまっていること。②自民党へのブレーキ役を自認する公明党もわずかな修正で満足し、全くブレーキ役を果たしていない。公明党は選挙でも自民党に協力し、その絶対多数獲得に貢献している。「平和の党」、「弱者の党」という立党精神はどこへ行ってしまったのか。③みんなの党、維新の会も党内がまとまらずふらふら。④反対した民主党、共産党、生活の党、社民党は議席数も少なく、一強自民の前には蟷螂の斧にすぎぬ。

衆参のねじれを解消した結果がこのような「素晴らしく迅速に決められる政治」になった。今回の秘密保護法案にかけた審議時間は今までの重

要法案の審議時間に比べて極端に少ない。参議院は「良識の府」「再考の府」であることを止めた。

我々は北朝鮮の体制を嫌悪している。しかしほんの七〇年程前迄の日本はああいう体制だったのだ。あの体制を「美しい国」として賛美し、「取りもどす」と力んでいるのが安倍首相だ。この法律はそのための第一歩だ。

民主主義とは国民主権のことであり、国民が国の政治のあり方を最終的に決める力を持っているということだ。国民が誤りのない決定ができるためには秘密があってはならぬ。原則すべての情報が国民に公開されていなくてはならない。そうでなければ国民は判断を間違う。大本営発表をそのまま信じていたら、ある日突然玉音放送が流れたというようなことは、二度と繰り返してはならぬ。

主権者たる国民に残された道はただ一つ。この暴挙＝強行採決を決して忘れず、次の選挙で自・公両党に鉄槌を下し、この法律を廃止することだ。

（中京大学名誉教授・法学博士）

のびのびとした教育

三沢　節夫

いまから「四分の三世紀」も前のことである。日中戦争は、年々、激しさを増して国の軍事予算は増えるが、多くの庶民の生活は食べることだけで精一杯の時代であった。子供たちは学校から帰ると、鬼ごっこ、かくれんぼ、兵隊ごっこなどで遊んで山野をかけめぐった。当時は、兄弟が7人とか8人、さらに10人を超えることも珍しくなかった。新しい服は買えず、兄姉たちの「お下がり」を着るのが当たり前だった。やぶの中を飛び廻って服がほころびると、私は、「とり」という名前の祖母につかまった。「セツオは彌縫でひまなしで、着ていて着物を縫うぞ目出たし、ソウカビラオンケン、ソウカビラオンケン」とオマジナイを唱えて、服を着たままで、ほころびをつくろってくれた。

ここでタイム・トンネルをすり抜けて現代に移る。今の子供たちは外に出て飛び廻ることはほとんどない。自分の部屋のなかでテレビを見て、ゲームをして、ケータイで友だちと話し合う。いま、大人はスマホの時代であるが、そのうちに、子供たちもスマホを持つようになる。そのスマホも3年くらいで終幕に向かい、そのあとは眼鏡型のグーグルグラスとかシャツ型の電脳服に移るという。私はこのようなオンライン社会の最前線を走っているわけではない。せめて、インターネットで、祖母が唱えた「ソウカビラオンケン」の意味を調べてみる。これは真言宗の本尊「大日如来」に祈るときの呪文「あびらうんけんそわか」で、「あびらうんけん」は地水火風空を表し、「そわか」はサンスクリット語で成就の意で呪文のあとにつけて唱える語だという。

情報量の巨大化を人類はコントロールできるのだろうか。人類の理性・感性・悟性がこの巨大化に押しつぶされてしまわないか。それに対抗できるのは、私は、教育の力だと信じている。長野県は古くから教育県と呼ばれてきた。諏訪の三沢勝衛のような卓絶した教育者を生んだ。思想上、旧制高校・大学に進めなかった若者が、師範学校に学んで教師となり、それが教育の質を高めたともいわれる。たまたま、昨年末の朝日新聞の「ひと」の欄に、伊那図書館長の平賀研也さんの記事が載っていた。平賀さんは伊那市の小学校の「のびのびとした教育」に共感して、子供とともに東京から移り住んだ。しかしこの地の人々が、この地の歴史と文化の価値に気づいていない。自ら応募して図書館長となり、図書館を拠点に、人々を歴史と文化に結びつけようと考えた。市民とともに街を歩いて、その歴史と文化を再発見するケイタイのアプリ「高遠ぶらり」を開発し、ライブラリー大賞を受賞した。情報に流されるのではなく、新しい情報（文化）を創ることは、まさに真の教育である。

伊那市の「のびのびとした教育」の心が、これからも多方面で花開くことを期待している。

（日本大学名誉教授）

伊那東中学校の思い出

三澤　毅

戦後の学制改革で新制中学校が出来たのは昭和二十二年であった。昭和九年生まれの私は昭和十六年国民学校第一回の入学生であり、奇しくも新制中学も最初の入学生となった。学制改革の落とし子のような廻り合わせである。新制伊那中学は机も十分にないまま一学年十一クラスのマンモス校として発足した。余りにも大きすぎる中学を分割し竜東の生徒を伊那東中学として分離することになったのは昭和二十四年四月のことであ

った。

新しい中学は古町の旧制伊那商業学校の校舎を利用してスタートすることになった。しかしその校舎はそれまで県立長野農専（現信州大学農学部）が数年利用した後であった。当時の専門学校生は教室への出入りは土足のままであり、中学三年の最初の仕事は一寸にもたまった土を外へ運び出し床の板目が見えるまで清掃することであった。かにかくに一学年三クラスの伊那東中学は発足した。

クラス担任は当初歌人で有名な松井芒人先生で校歌の作詞者で高木東六先生作曲の「東の丘の朝ぼらけ」は生徒に親しまれた。松井先生は健康上の理由で赤羽映土先生に代られた。赤羽先生はクリスチャンであり、はみ出しがちな私を内村鑑三の書や話で教化してくれた。またハギの花が好きで近く山からハギを引いて校庭の隅に植えたりした。

当時の新制中学は「野球ばかり上手くなり」の状態で野球部の監督をされたのも赤羽先生であった。当時のバッテリーは高校進学後もそのまま続き相当の活躍をした。私も当初野球部の一員として練習に参加していたがある時新しいユニフォームが出来たとき事件は起こった。早く新しいユニフォームを着たい悪友にそそのかされ赤羽先生に右代表として陳情に及んだところ「貴公、野球やめろ」の一言であった。退部したことはもちろんである。

たった一年間の丘の上の生活、赤羽先生とともに思い出は尽きない。

（㈱日本林業技士会顧問）

アベノミクスに思うこと

三澤　満

アメリカのレーガン大統領が掲げた経済政策は、レーガノミクスと呼ばれ、今回は、安倍をエコノミクスにつけた。安部政権発足から1年経ったから、今は、その現状評価の時期である。株が上がり、円安となって、その効果は確かに現れている。しかし、株を持たない多くの人々、円安メリットを受けない企業には、この効果は及んでいない。まだ、地方に及んでいないとの批判の出る理由である。その目指すところは、デフレからの脱却である。物価の上昇を2年で2％を目指しているが、1年経った現在、それは難しいと思われ、せいぜい1％台で終わるのではないか。

日本の一九九九年以降のデフレの原因は、需要不足、供給要因、金融政策にあるとし、アベノミクスでは、大胆な金融緩和によるデフレ不況および円高不況からの脱却、大型公共事業による景気対策が主な柱。マネータリーベースとは、日銀への当座預金と市中に出回る現金をいうが、金融緩和の基本方針は、これを年間60―70兆円増す。

日銀は、この量的緩和で、物価の上昇2％を目指し、景気を「前向きに循環」させようとする。日銀の言う期待インフレ率は、消費者、企業、投資家が予想する将来の物価上昇率。これは、物価が将来どれくらい変動すると市場が見ているかを示すもので、実際のインフレ率と連動すると共に、先行して動く傾向がある。二〇一三年四月に日銀が異次元緩和（量的・質的金融緩和）を打ち出したが、その理論根拠として、市場の期待インフレ率が上昇するように積極的に働きかけることで、実際の物価上昇率もそれに近づくという発想が背景にある。今、将来のシナリオは理論的には、以下の4つの可能性が考えられる。

⑴目論見通り、デフレを脱却し、経済は成長軌道にのる。

⑵インフレ率2％達成は困難で、デフレが継続するとする説。

⑶不況深刻化説。

⑷超インフレ懸念の説。

現状⑵説が有力である。アベノミックスは、経済でなく、政治と認識すべきである。政府が何かをしてくれるのでなく、主役は、個人であり、企業である、政府の役割は、その環境作りと掛け声のみである。個人消費が増え、企業が設備投資をしなければ、経済成長はない。予想インフレ率が高まれば、個人も企業も動くとの理論がこの根底にあるが、目下まだその動きは、緩慢である。

（ハワイ大学経営学部大学院教授）

カサブランカは白い建物がいっぱい

宮原　照夫

六月のロンドンは、なんとなく重苦しい。そんな中で出版の会議が全世界から集まって行われていた。四年に一度持たれていたが、今年は著作権が主な題材だった。第一日

目は何の講義、第二日目は何の講義、というように毎日著作権に関する講義が続いた。ロンドンの町は講義で毎日が過ぎた。そして、それは一週間後の土曜日まで続いたのである。

講義が終わり慰労会が盛大に持たれた。会場は、なんとあの『大英博物館』だった。博物館の内容物は、もちろん一部しか見られなかったが、すばらしい内容だった。

※ ※ ※

翌日からは、三班に分かれて各地を回った。私たちは、ポルトガル・カサブランカ・モロッコ・タンジール・フェズ・アルハンブラ宮殿・パリだった。

まずはポルトガルである。古い都市であった。食べ物しか記憶にないが、とにかく炭火焼がうまかった。

先を急ごう。

次はカサブランカである。カサブランカは一度行ってみたいと思っていた所である。乗ったジェット機はかなり古い機体で、ガタピシと音が鳴いていた。ひやひやしながら乗っていた。降りてみるとなかなか立派な町で、白い建物がいっぱいであった。

カサブランカに近いラバトという所で食事をしたが、店そのものがちょっと古い感じだった。そこで食べた昼食は、日本でいうとチャーハンみたいなものだったが、食べてみてまたビックリ、チャーハンとは味がぜんぜん違っていた。

次の日はゴルフである。このゴルフ場は大きなゴルフ場で、非常に行き届いている45ホールだった。私たちはまわれなかったが、フラミンゴがいて素晴らしいゴルフ場だった。私たちが回ったコースもなかなかのもので、隣のホールが見えない、完全にセパレートされていた。

次の日もゴルフだが、どこにもゴルフ場が見当たらないのである。いろいろ聞きまわってやっと探し当てたのは、城の中だった。城は取り壊されていて、そこがゴルフ場になっていた。これには驚いた。

そこからかなり車で走ってフェズといったが、土気色した大きな建物が出てきた。そこがホテルだった。

次の日は、ホテルを早目に出て、アフリカの北端の町タンジェールを目指した。タンジェールはアフリカのもっとも北寄りの町で、そこそこ賑わっていた。

タンジェールを出た船は、一路スペインを目指して出航した。

スペインでは、アルハンブラ宮殿をじっくり拝見し、マドリッドで一夜を過ごし、パリ経由で帰国した。

(元週刊少年マガジン編集長)

「ROYAL GOLE DAR ES SALAM」でモロッコ人３人と

ポルトガルで

絵の宝庫 伊那

向山 僚一

伊那谷の画家は勿論、多くの画家が伊那へ取材に来るのは、天竜川が流れる伊那市より二大山脈が身近に終日眺められることであり、森・田畑・家並を前景に素晴らしい感動風景が豊富であり、一昔前になりますが、私も数名の画家に伊那谷取材の折、絵になる場所、かやの高原よりの絶景美景、そのほか紹介しつつ歩き回ったことがあります。中でも花の丘公園や高地よりの伊那全景、旧役場上の道からの南アと仙丈岳と公園の桜等々、他にも三峰川よりの眺め等、絵にしたい所は数多く、嬉しくてなりません。

有名月刊誌「一枚の絵」にも度々採用され、私の作品は一九八〇年頃より昨今まで、伊那谷取材の作品だけでも45回になっております。他にはあずみ野から白馬三山の北アルプスの作品も多々ですが、やはり出身地が伊那高遠故か、絵の宝庫、伊那に故郷を持つ私は、今後も伊那を主体に描き続けます。新宿伊勢丹本店での個展も39回目となり、注目されるようになってきたのは、主に伊那の大地作品にある訳で嬉しく思います。

昨今、特に嬉しく思ったのは伊那全景望見の地を描いたテレビ等でも有名な片岡様が伊那全景の絶景作品をテレビで紹介!を知人より知らされ、私の作とほぼ同じ場所からとわかり、嬉しく思いました。

絵の宝庫伊那市の益々の発展を!!と思います。

(洋画家)